

Title	フッサールにおける体験の空間的構造
Sub Title	Raumliche Konstruktion der Erlebnissen bei Husserl
Author	菅我, 英彦(Soga, Hidehiko)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1968
Jtitle	哲學 No.52 (1968. 3) ,p.153- 177
JaLC DOI	
Abstract	<p>Unter den Phanomenologieforschern ist es weit anerkannt, dass der Begriff "Lebenswelt" eine zentrale Bedeutung in Husserls spaterer Phase seiner phanomenologischen Entwicklung hat. Dagegen sind die Interpretationen von der Lebenswelt je nach der Einstellung einzelnen Forschers, einschliesslich Husserl selbst, uneinheitlich und vielseitig. Andererseits gibt es durch diese einander verschiedenen Interpretationen hindurch doch einige wesentliche Gemeinsamkeiten, die vielleicht die Gewinnung eines einheitlichen Lebensweltbildes moglich machen. Eine der diesen Gemeinsamkeiten ware es, dass die Lebenswelt eine im irgendeinen Sinne raumlich zu nennende Konstruktion haben soll, mit der man sie erst als die "Welt" überhaupt charakterisieren kann. Auch eine andere Gemeinsamkeit liegt darin, dass man die Lebenswelt als eine geschichtliche, d.h. als zeitlich konstruierte Welt betrachtet. In diesem Zusammenhang konnte man wohl der Lebenswelt eine einheitliche raum-zeitliche Allgemeinform zumuten. Jedoch darf diese Raumzeitlichkeit eben nicht im gleichen Sinne aufgefasst werden wie etwa bei Galilei oder Newton, denn die Lebenswelt Husserls gerade eine solche ist, die, wie er sagt, alle alltagliche, verwissenschaftlichte oder mathematisierte Welten als Transzendenten darunter umfassen und damit eine hohere, nicht sogenannte blosse vierdimensionale, Struktur besitzen soll. So scheint es, dass es uns nun kein anderer Zugang zur Erhellung ihrer Konstruktion bleibe als durch besondere Raumstruktur im topologischen Sinne, solange wir sie doch als raum-zeitliche betrachten wollen. Andererseits ist die Lebenswelt keine rein formal-abstrakte, sondern eine real-konkrete als das Feld aller moglichen Erlebnissen in den intentionalen Bewusstsein-Gegenstand Korrelationen. In diesem Zusammenhang ist es in der vorliegenden Abhandlung beabsichtigt, zuerst der Begriff "Welt" bei Husserl, weiter seine Auffassung Leben bzw. Erlebnis überhaupt und schliesslich ein einheitliches Bild seiner Lebenswelt im weitesten Sinne festzustellen, damit evtl. jede sonstige Teilinterpretation unter solcher Allgemeinstruktur einzeln revidieren zu können.</p>
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000052-0153

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

フッサールにおける体験の空間的構造

Räumliche Konstruktion der Erlebnissen bei Husserl

曾 我 英 彦
Hidehiko Soga

Resümee

Unter den Phänomenologieforschern ist es weit anerkannt, daß der Begriff „Lebenswelt“ eine zentrale Bedeutung in Husserls späterer Phase seiner phänomenologischen Entwicklung hat. Dagegen sind die Interpretationen von der Lebenswelt je nach der Einstellung einzelnen Forschers, einschließlich Husserl selbst, uneinheitlich und vielseitig. Andererseits gibt es durch diese einander verschiedenen Interpretationen hindurch doch einige wesentliche Gemeinsamkeiten, die vielleicht die Gewinnung eines einheitlichen Lebensweltbildes möglich machen. Eine der diesen Gemeinsamkeiten wäre es, daß die Lebenswelt eine im irgendeinen Sinne räumlich zu nennende Konstruktion haben soll, mit der man sie erst als die „Welt“ überhaupt charakterisieren kann. Auch eine andere Gemeinsamkeit liegt darin, daß man die Lebenswelt als eine geschichtliche, d. h. als zeitlich konstruierte Welt betrachtet. In diesem Zusammenhang könnte man wohl der Lebenswelt eine einheitliche raum-zeitliche Allgemeinform zumuten. Jedoch darf diese Raumzeitlichkeit eben nicht im gleichen Sinne aufgefasst werden wie etwa bei Galilei oder Newton, denn die Lebenswelt Husserls gerade eine solche ist, die, wie er sagt, alle alltägliche, verwissenschaftlichte oder mathematisierte Welten als Transzendenten darunter umfassen und damit eine höhere, nicht sogenannte bloße vierdimensionale, Struktur besitzen soll. So scheint es, daß es uns nun kein anderer Zugang zur Erhellung ihrer Konstruktion bleibe als durch besondere Raums-

struktur im topologischen Sinne, solange wir sie doch als raum-zeitliche betrachten wollen.

Andererseits ist die Lebenswelt keine rein formal-abstrakte, sondern eine real-konkrete als das Feld aller möglichen Erlebnissen in den intentionalen Bewußtsein-Gegenstand Korrelationen. In diesem Zusammenhang ist es in der vorliegenden Abhandlung beabsichtigt, zuerst der Begriff „Welt“ bei Husserl, weiter seine Auffassung Leben bzw. Erlebnis überhaupt und schließlich ein einheitliches Bild seiner Lebenswelt im weitesten Sinne festzustellen, damit evtl. jede sonstige Teilinterpretation unter solcher Allgemeinstruktur einzeln revidieren zu können.

I

フッサールの現象学が „事象そのものへ“ という標題の下に出発して以来、次々に段階的に発展し、ついには彼の後期思想の中心的位置を占めると目される『ヨーロッパ学問の危機と先験的現象学¹』における „生命界“ (Lebenswelt) の概念に到達したことは、多くの現象学研究者によって認められているが²、しかし生命界についての解釈は、(フッサール自身も含めて) 研究者の間で必ずしも一定していない。例えば、学問界 (wissenschaftliche Welt) に対する前学問的世界としての生命界³、直接的経験によって把握される生命界とそのアプリアリ⁴、学問的知識獲得の地盤としての生命界(むしろ生活界⁵)、思惟ないし思弁によって捉えられる生命界⁶、更に

1. Husserl: „Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie“ = Hua. Bd. VI.
2. 山本教授: 『生命界』の「はしがき」と p. 17 参照.
3. Paci の „Mexico Symposium“ の論文 p. 65 参照.
4. „Mexico Symposium“ 中の Landgrebe の論文, p. 39 参照.
5. Funke: „Phänomenologie“ の B6 参照.
6. Fink: „Welt u. Geschichte“ p. 153-54 参照.

それらの各局面を含んだ先験的生命界⁷などの解釈が見られる。

これらの解釈の多様性は生命界問題への接近仕方の相違によると共に、フッサール自身が必ずしも統一的な生命界概念を打ち出していないことにもよるのだろうが、ただし生命界を歴史的な世界と見る点では各々の解釈に共通性が認められる。つまりこの生命界はいわゆる現象学的時間を基調とするダイナミズムの世界であると言える。このような共通性を手掛りにして最も広い意味での生命界の概念を得ることができれば、個々の解釈を最広義の生命界の一局面として位置づけることができるように思える。つまり、この歴史的な生命界の「前範疇的（ないし前論理的）アプリアリは……『新しい学問』によって説明さるべきである⁸」と言われる場合に、そして確かに生命界を伝統的な範疇概念だけをもって全面的に把握することは不可能だとしても、この世界は一切の論理的ないし学問的接近を拒む超越的実在界ではないだろうし、また「生命界の範疇性は、たとえ同じ名前と呼ばれていても、いわば幾何学者や物理学者の理論上の理念化とか仮定的な基礎構造に関わりを持たない⁹」といわれていても、一般に3次元的な立体として表象されている『空間』や、古典物理学的な『時間』などの概念によって生命界の構造を記述しきれないことも確かだろうが、やはり「世界全体はそれに特有の空間的・時間的無限性の形式の下に意識される¹⁰」かぎりには、生命『界』は世界といわれるべき何らかの構造を持つものだろう。またもしその時空的構造が単なる思弁に終るものでないとするれば、「これらについては表現すべき言葉がない¹¹」というよりも、たとえ一面的な記述に終るとしてもそれらを表現できる何らかの記述体系を探究することも無駄ではないだろう。

7. 山本教授：『生命界』p. 205-210 参照。

8. Paci の上記の論文 p. 73.

9. 『危機』S. 143. 但しフッサールの幾何学や物理学に対するイメージは、ユークリッド幾何学や古典物理学の範囲を特に越えるものとは思われない。

10. 『省察』S. 75.

11. 『時間意識』S. 75.

こうして我々が一般に構造的なものに対して現在持ちうる最も広範囲な概念として、位相幾何学における空間概念¹²を導入すれば生命界の構造をより明確に記述できるように思える。つまり、フッサール現象学の発展段階に現われる世界概念の各局面を、単純な空間構造から更に高次の空間構造を持つ世界への移り行きとしてながめ、生命界はその発展過程における最も高次の構造を持つものであろうという予想の下に、フッサールの生命界問題に接近を試みることにする。

II

生命界概念の成立にいたるまでの予備段階は、フッサール現象学の始源からすでに用意されていると見られるが、『危機』においては差し当って世界概念の発生とその歴史的展開が述べられ、また特に『省察』において現象学的な意味での一般的な世界概念が段階的に展開し、生命の意味と共に „生命界” の構想が予示されている。ここではこの関連の概略を述べることにする。

いわゆる自然的認識立場に立つ素朴人は、自分の目前に存在する客体を、自分の意識と無関係であってもそれ自体で成立するものとして意識している。それと共に自分を中心にして空間的に無限に拡がり、時間的に無限に伸びる環境的世界を意識し、個々の対象を時と場所に従ってその世界の中に位置づけている。こうして世界は先づ超越的実在としての多様な客体の存在が可能な場として、何らか時空的な構造を持つものとして、そして同様に超越的な実在世界として認識されている。

このような認識立場は単に日常的な生活態度の中だけに留らず、むしろ

12. 位相幾何学においては点とか線といわれるものから無限次の空間にいたるまで一様に空間という言葉で表現される。時間もまた特殊な（普通には1次元の）空間である。不正確な表現ではあるが、伝統的に時間と対立する意味での空間（特にユークリッド・ニュートンの次元空間）を、必要に応じて „空間” と書くことにする。

学問的な自然的立場において一層強化される。日常生活における世界の妥当性とそこで有効な真理の個人的、歴史的、地理的な相対的変動に対して、絶対的普遍妥当性を持つ厳密な真理とその世界が求められるようになる。こうしてプラトンのイデアの世界によって代表されるような「世界の学問化」¹³が初まった。この世界の普遍的妥当性に基づく超越的客観性と学問的厳密性のモデルとして（プラトンにおけるイデア数のように）何らかの数の体系が導入され、日常的世界における時と場所に関連して世界を構造化する規範としての空間と時間について、決定的、一義的に計量可能な量的構造を持つものだけが真の世界と認められた。こうして自然学的世界説明における超越的客観性は、時空構造についての決定的計量可能性を前提として成立したが、ここで注意すべきことは、その計量可能性がそれに適用される数体系の構造に依存することである。文字通り自然数で「割り切れる」世界だけを唯一の真なる世界と認めようとしたピタゴラス一派の自然美学に取って、正方形の対角線比 $\sqrt{2}$ のような無理数の体系で表現されるような世界は計量が無理な、従って真の自然ならざる世界であった。このような認識の下にユークリッドの（特に3次元までの）幾何学空間、ガリレイの（4次元的な）物理学的宇宙、ニュートンの絶対時間と絶対空間によって規定された絶対運動の世界などがそれぞれの時代を代表する唯一の超越的実在の世界として登場して来た。フッサールはこの事情を「世界の理念化と数学化」¹⁴として特徴づけている。

しかしこれらの超越的実在界も実際は意識と全く無関係に成立しているわけではなく、むしろ超越的実在として意識された対象であり、意識の仕方に相関的に依存して上記のような様々の世界が構成されている。こうし

13. 『危機』S. 339-341 参照.

14. 『危機』§8-9 参照. フッサールはアインシュタインやプランクを代表とする現代物理学的世界にも言及し、それをやはり数学化された超越的実在界と見ているが、この点に関する彼の評は必らずしも当を得ていない。むしろ現代物理学の立場は現象学の立場に近いことを後に探究する。

て意識は必ず何らかの対象を志向する意識であり、逆にある特定の対象は特定の意識状態と不可分の相関々係にあり、この両者の組み合わせを単位として一つの体験が成立する¹⁵。これと関連して、本来は意識された対象としてのみ意味を持ちうるものを意識とは無関係な超越的実在と思い込むような考え方に対しては判断中止が行われるべきであるが、しかしこの判断中止はそのような対象ないし世界の存在否定ではなく、それらをいわゆる現象学的還元によって意識の領域に戻し、意識の相関項という本来の姿において眺めようとするのである¹⁶。

一つの体験について、先づ意識側について反省してみると、意識は固定的、静的な状態にあるわけではなく、局面に従って流動的に変転する意識状態の多様性が見られる。更にいくつかの相互に区別できる単位体験が統一的に意識されるような高度の反省的体験が行われて諸対象の同一性あるいは非同一性が総合的に意識され、このような仕方で更に高度な意識段階に進むと共に「全体の意識の生命が総合的に統一される……このような、その他のすべての意識綜合を可能にする普遍的綜合の基本形式は、すべてを包括する内的時間意識である。それに相関的に対応するものは内的時間性（あるいは現象学的時間）そのものであって、自我の個々の反省によって見出される一切の体験は、この内的時間性に依じて時間的に秩序づけられたものとして現われて来る¹⁷。」このようにして意識の多様性は先づ時間的構造の下に眺められ¹⁸、それと共に同一の状態に留る自我から、その自我

15. 『省察』§14 参照.

16. 『省察』§8 参照.

17. 『省察』§18, S. 81.

18. ここで注意すべきことは、意識の多様性が、それ以前に先天的に実在している何らかの時間形式によって構造化されるのではなく、むしろ逆に意識の多様性の流動的なあり方に従って構成される形式に現象学的時間という名前が与えられることである。このような構成関係からすれば、フッサールの時間は、内官の先天的形式としてのカントの時間とは逆の関係にあり、むしろ時間があるから運動があるのでなく、運動があるから時間があるとするアウグスティヌスの見方に近い。

の生命をも含む流動的な意識の生命に重点が移って行く¹⁹」のであって、結局フッサールにおける生命の意味は、意識性ないし意識相関性とその流動性によって特徴づけられることになる。

こうして意識の流れと共に内在的世界ともいふべき体験流が得られる。つまり、意識流といわれる場合には、必らずその各局面に対応する対象の多様が相関的に問題の中に含まれており、更にその両側面の相関的統一としての体験流も必らず一緒に意味されているのである。言いかえれば体験流は特定の意識状態とそれに志向的に対応する特定の対象との相関々係を横軸とし、意識流によって代表される流動性を縦軸とする構造を持つものといえる。このような意味で、体験流はすでに世界と呼んでも差し支えない構造を示しており、しかもこの世界は上にのべた生命性の意味からしてすでに生命界と呼ばれるべき最も原初的な特性をそなえている。フッサールはこの体験流の全体を第一次世界²⁰といているが、それはまた上の理由からして最も原初的な構造を持つ生命界と解釈することができるだろう。

ここで我々は特定の意識状態を記号 s で表わし、それに対応する対象を o 、両者の志向的関係を \leftrightarrow で表わせば、一つの体験は $s \leftrightarrow o$ と書くことができるだろう。更に体験流は $\{(s_1 \leftrightarrow o_1), (s_2 \leftrightarrow o_2) \dots (s_n \leftrightarrow o_n)\}$ というような系列の形で表現できるだろう。このような系列の全体的な関係を関数関係を借りて、 $o=f(s)$ と表現しても差し支えないだろう。一般に $y=f(x)$ で表現される関数関係において、 x とは無関係な y それ自体、あるいは y に全く依存しない x それ自体が一体何であるかを問題にすることは全く無意味であるように、現象学的にいえば意識と対象との相関々係を離れて意識それ自体、あるいは対象それ自体を個々に考えることは全く空虚な思弁にすぎない。またフッサールにおいて体験流と意識流の区別が

19. 『省察』 §14, S. 70.

20. 『省察』 §58, S. 162-3 参照。事実ここではすでに „生命界” という言葉が使われている。

必ずしも厳格でないということも、全くこの事情に基づくのであって、不可分の全体を強調する場合に体験流といわれ、またその一方の側面を強調する場合に意識流と呼ばれるにすぎず、志向的相関々係からすれば両者は結局同じものを表現しているのである。

また現象学的時間意識によって反省的に綜合された諸体験の縦の構造形式に対する名称であるが、ここで体験の多様性に対して「空間」性を導入せず、時間性だけを考慮して果して世界といえるような構造を与えることができるのか、あるいは現象学的時間と共に現象学的空間というべきものも考えるべきではないかという問題が生じる。しかしこの段階においては後にのべるような理由によって体験の空間性は必ずしも決定的な問題にはならないが、上にあげた系列における $s \leftrightarrow o$ を、たとえ普通の意味での「空間」のイメージをもって表象することは困難であるとはいえ、現象学的単位空間と呼んで差し支えないだろう。このような意味での時空的構造を持つ世界は、前にあげたような客観的実在界とは明確に区別されるべきものであるが、他方それらの実在界は第一次的世界と全く無関係なのではなく、むしろ意識流に現われるある特殊な意識状態、つまり世界意識の相関的対象として、その意識の仕方に制約されて、第一次世界の対象側に現われる「第二次的に構成された世界」であり、「このようにして第二次的世界は……第一次的世界、つまり我々が体験流と呼ぶ内在的世界に対してすでに与えられている。²¹」

結局フッサールの場合にも、一般に世界とは相互に位置的な意味で関連づけられていない事象の単なる集まりに何らかの意味で時空的な構造が与えられて成立するのであり、こうして「世界という全体はそれに特有な空間的・時間的無限性の形式の下に意識されている。」しかし体験流としての第一次的世界に妥当する時間ないし空間の性質は、前にのべた客観的実在

21. 『省察』 § 58, S. 161.

22. 『省察』 § 15, S. 75.

界を構造づけている一義的に計量可能な空間や時間とは著るしく異った性格のものであることが解る。しかもそれらの客観的実在界は、第一次的世界に現われるある特殊な意識状態、つまり世界を超越的実在として把握するような意識状態の相関項であって、いいかえればまさにそのような意識の仕方に全く従って第一次的世界の対象側に構成された世界なのである。またこのようにして、世界意識の仕方の変更あるいは多様性に応じて、様々の客観的世界が構成されてくる。ここでは特にフッサールが用いる「客観的」(objektiv)という言葉の多様性に注意しなければならない。いわゆる自然的立場において「客観的」とは「普遍妥当的」ということ、同様に「超越的」ということを意味している。しかし彼の現象学的立場においては「对象的」すなわち「主観と相関的」(subjektiv—relativ)ということなのである。²³ フッサールはこのようにして特定の主観と相関的に对象的に構成された世界を第二次的に構成された世界と呼ぶが、「このようにして第二次的世界は……第一次的世界、つまり我々が体験の流れと呼ぶ内在的世界に取ってすでに与えられているのである。」²⁴ このことからすれば、先づ意識流に従って構成された現象学的時間における以前、いま、以後などの時間性に、更に例えば計量の絶対的同等性あるいは絶対的同時性などの概念を導入することによってニュートン的な時間が構成され、次いでこの時間の中に多様な物理的現象を位置づけることによって古典物理学的世界の時間的構造が与えられる。ただしこれが唯一の第二次的世界の構成仕方ではない。絶対的同時性に代って相対的同時性などの概念を導入してアインシュタイン的世界を構成できるし、またユークリッド的な空間の絶対的等質性を空間の非等質性で置きかえれば、リーマン幾何学的空間を得ることができるだろう。このことからしても、意識から絶対的に超越的な世界それ自体を想定することは全く無意味な空虚な形而上学的思弁なのである。

23. この点に関しては更に山本教授の『生命界』p. 242-3 を参照。

24. 『省察』§ 58, S. 161.

この意味では、第二次の世界に対して先験的な第一次の世界すら自我の意識の先天的な構造に基づいて構成された世界であり、またそのようにして構成された世界ないし対象を手掛りとして逆に意識の先天的構造を分析することができる。²⁵

以上のようにして様々な世界を階層的に構成する自我はその世界の中に自分の身体も含めてそれとの類似性を持つ身体の群を他人の集団として意識し、更に各々の身体的他人が単なる物体ないし生物ではなく、自分と類比的な意識生命を営んでいる „わたくし的なもの“ (das Ichliche) であることを一種の感情移入によって発見する。このような意味で自我を含めての我一般を、フッサールはまたモナドとも表現するが、更に他我に対する自我は原モナドといわれ、こうして他人は他我にモナド論的に還元される。²⁵ しかもこれらの各モナドは「それぞれに客観的世界を構成し、そうしてその中に自分を空間化し、時間化し、実在化しているモナドに他ならない。」²⁷ このことからして、モナドの多数に対応し、更に個々のモナドの世界構成の仕方の多様性にも対応して、多数の世界群とそれぞれの世界に固有の空間ないし時間の多様性が現われて来ることになる。この段階でのモナド群あるいはその諸世界は必ずしも相互に組織化されておらず、個々別々の状態にある。しかし自我は自分を原点として時間的空間的に方位づけて構成している世界の中に他我とその世界を一緒に構成し、また他我は自我と

25. これがいわゆる „先験の手引きによる意識構造の分析“ であるが、この方法からして、先験的アプリアリといわれる意識そのものも決して超越的実在として絶対的意識それ自体を意味するものではない。この方法は更に具体的な形でサイバネティクスにおけるいわゆる „Black Box“ 方法に対照して考えられるだろう。(例えば Klaus の『Kybernetik』の特に S. 197-240 を参照)。

26. フッサールにおいて「モナド論的還元」と後出の「相互主観的還元」の区別は必ずしも厳格ではなく、両者重複して用いられるが、便宜上本文においては他人を他我に個々に還元する際には「モナド論的還元」とし、更にそれを相互に関連づけられたモナドの共同体に還元する場合に「相互主観的還元」として一応の区別をした。

27. 『省察』S. 166.

その世界を同様な仕方で構成している。このような作用の類比性と相互性に基づいて、モナドの単なる集まりは人類としてのモナドの共同体にまで統一されるが、更にそれとは別の仕方で特に時間的な構造がこのモナド共同体に与えられる。つまり、「多くのモナドが一緒に居るといふこと、すなわちそれらが単に同じ時に居るといふことは、本質必然的に時間的な同時存在を意味するようになり、更にこのことは実在的な時間の形式において時間化された存在をも意味するようになる²⁸。」このことはまた、自我との共存という多数のモナドの特定の在り方に従って同時性が構成されることによつて「いま」とか「現在」といふような時間性が意味を持つようになり、更にそれ以外のモナド共同体の在り方に従つて、過去とか未来といふような時間が構成されるということを示唆している²⁹。またすべての可能なモナドという在り方に従つて一つの全体的な時間の形式が与えられ、こうして歴史的に現われる一切の個々のモナドがこの時間の中に相互に位置づけられる。この時間は以前の自我の段階で構成された現象学的時間を基礎としながらも、それと共にすべての他我の内的時間をも含む統一的時間である。またこれと同様な仕方でモナド群を空間的に統一することもできるだろう。こうしてすでにこのモナド共同体そのものは統一的時空構造をもつて主観側に現われる高次の世界なのである。更にこの統一的モナド世界は集団的全体として対象構成作用を持つといふ意味で相互主観性の世界でもある。つまり、「他人の世界の多様は私の世界に関して方位づけられたものとして、すなわち一つの世界として与えられるが、それは他人の世界の多様がそれに内在する一つの共通の客観的世界と同時に成立するからであつて、こうしてこの客観的世界の時空形式は同時に他人の世界に接近するための形式といふ機能を持つている³⁰」のであるが、逆にこの客観的世界を手掛りとしてみれば、「こうして構成的に相互に結合されるモナド群

28. 同頁。

29. 更に詳しい時間構成の仕方に関しては『時間意識』の特に S. 76-79 を参照。

30. 『省察』S. 162.

の時間的共同体は、一つの世界や一つの世界時間と本質的に関連しているのだから、解体することはできない³¹」のであって、結局モナド群に対応する世界群がモナド共同体に相互主観的に還元されて、そのモナド世界の持つ高次の時空的構造の形式を与えられることによって、相互主観性に対応してその対象側に高次の統一的客観世界が構成されて来るのである。こうしてまた必ずしも厳密な言い方ではないが、あらゆる可能な体験の統一を考えた場合、その主観ないし意識側に一切の第一次的世界を含む高次のモナド世界が現われ、それと相関的にその客観ないし対象側にすべての第二次的世界を含む高次の統一的客観世界が現われると解釈することができるだろう。

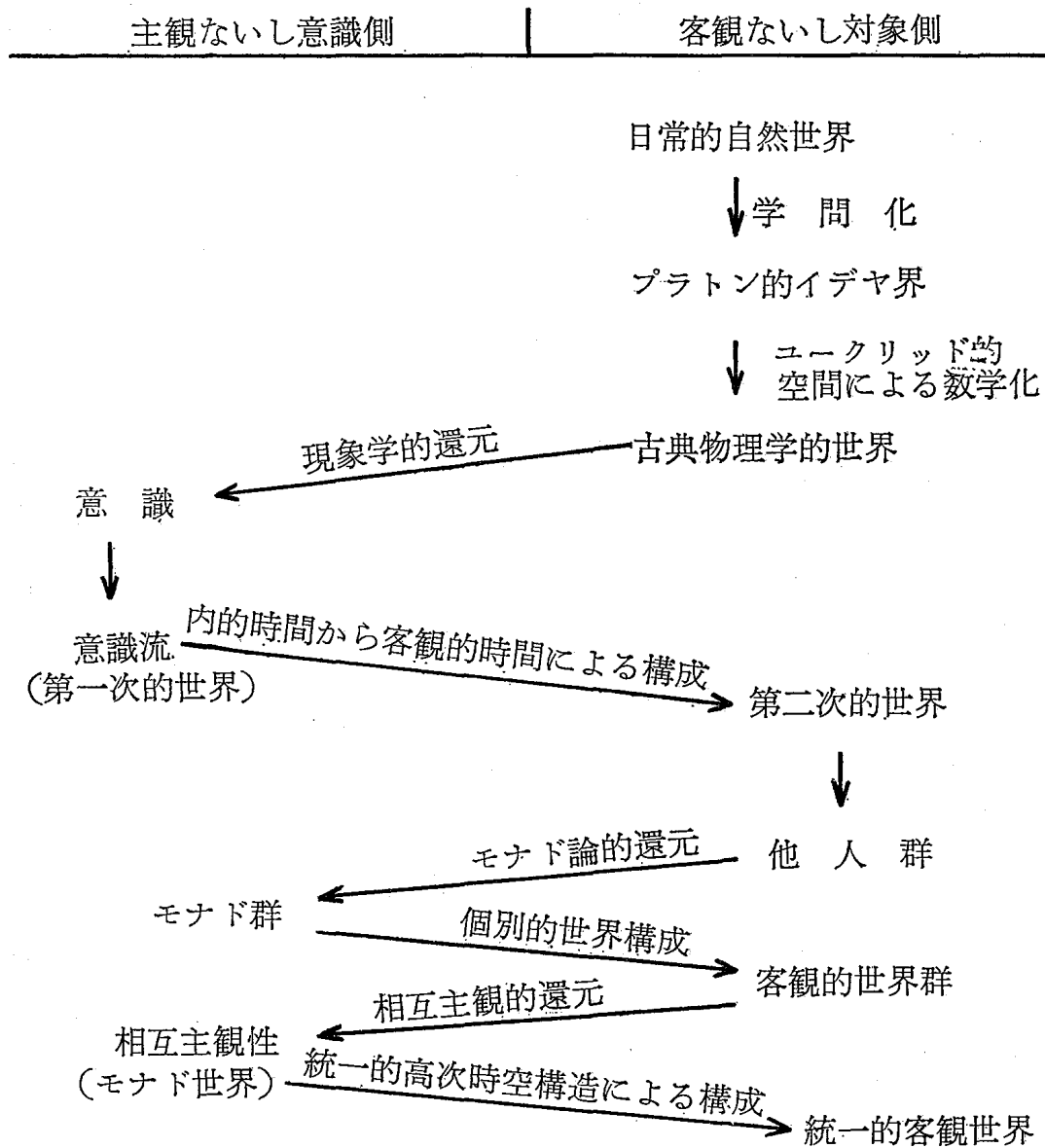
さてここで以上のような『省察』における世界階層の段階を不十分ながら次のように図示することができるだろう。

しかしここで世界構造の分析の問題が終ったわけではない。これまでに見て来たかぎりでの最終段階においてそれぞれ意識側と対象側に現われる二つの高次の世界を、その相関的な構成関係に基づいて更に高度な段階において統一する可能性を確かめるという問題が出て来る。フッサールはすでに『省察』においてまさにこの問題を統合的な生命界の問題として予示している。つまり、「今のところ我々は、この高次の問題が構成的な問題であることを暗示したこと、そうして、我々すべての不断の生命の世界は全く統合的な世界なのだが、必自然的な自我の先験的現象学的な探究を体系的に推進してゆけば、結局は世界の先験的な意味もまた全く統合的な形で我々に開示されるはずだということを明らかにしたことで満足すべきだろう。」³²

こうして次には今までに見て来たあらゆる個々の世界の段階をその中に含むような世界の概念と構造が考えられるようになる。この最も広い統合

31. 『省察』S. 156.

32. 『省察』S. 163.



的な意味でのフッサールの世界概念は、「世界とは普遍的な場 (Universal-field) であって、その場の中にはすべての我々の作用、経験し、認識し、行為する作用が組み込まれて位置づけられている³³」という言葉に端的に示されるだろう。このことは我々の、つまり歴史的に現われうるあらゆる自我の意識が可能な場を意味し、更にその対象相関性からして同時にあらゆる対象が可能な場でもあることを示唆している。また、「我々は具体的には身体的なものとして、しかし単に身体的なものとしてばかりでなく、全

33. 『危機』S. 147.

き私という主体 (Ich-Subjekt) として、それぞれ全き私という人間として、知覚の場等々に、そして更に広い意味では、意識の場 (Bewußtseinsfeld) に居る³⁴」ということからして、この普遍的な意識の場はまさにその意識生命性からして生命界に他ならない。

さて次に問題になるのは、この統合的生命界そのものの一般的な構造である。フッサールが『危機』において一貫して強調しているように、この統合的生命界は原初的生命界と同様、特にその時間性を特徴とする歴史的な世界である。普通に歴史的な世界といわれるものの最も単純な構造として、一般に何らかの原点を設定した4次元の座標空間を導入できる。ところが「世界は一般に私にとって我思う (ego cogito) の中に意識されて存在し、私は取って妥当する世界以外の何ものでもない³⁵」のであって、こうして世界は前述のように自我を原点として時間的空間的に方位づけられているとすれば、ここに一つの難問が生じて来る。つまり、統合的生命界は更にその中に個々のモナドによって構成された客観世界や、また相互主観性としてのモナド界のようなまさに歴史的な諸世界を含んでいる。しかもあらゆる他我はそれ自身においては自我なのだから、もしこの統合的生命界が何らかの中心ないし原点を設定された構造を持つとすれば、この世界は高度に複雑な多中心的構造を持つことになる。しかもこの世界はその歴史性と共に、その世界内での特定の意識状態とその特定の対象との相関的相対性を持つ全く相対的な諸関係の世界であるが、「そのあらゆる相対性におけるこの生命界はやはりその一般的な構造を持っている。すべての相対的に存在するものを結びつけているこの一般的な構造そのものは相対的ではない³⁶」ことからすれば、その構造を何らかの方法で更に整理された形で提出すれば生命界問題の紛糾を避けられるのではないかと考えられる。

生命界の難問題は結局るところ、このような多中心的な、しかも多重化

34. 『危機』S. 110.

35. 『省察』S.

36. 『危機』S. 142.

された生命界の全体構造を、どのようにして „この私” だけを中心にして余す所なく方位づけることができるかという問題に代表されるだろう。言いかえればこの問題は „この私” を原点とする 4 次元的空间の中に、どのようにして他の 4 次元的空间座標系を組み入れることができるかという問題である。この点に関連して、結局フッサールの世界の „時空間的構造” に関するイメージは、ガリレイ的な 4 次元空間の構造の概念を出なかったように思われる。こうして我々はこの問題に当面して先づ世界ないし空間の 4 次元性という概念の制約をはなれねばならない。そうして更に高次元の統一空間構造を導入し、その上で „この私” をその高次元空間の座標系の原点として設定してみれば、事態はより統一的な整理された形で理解できるのではないかという予想の下に生命界の一般的空間構造を追求しよう。

III

以上のようにして考察して来たフッサールにおける各世界層の段階を、特に位相幾何学における一般的な空間概念の助けをかりて、統合的生命界にいたるまでの空間構造を順次解明して行くわけであるが、前にものべたとうり、ここで用いられる空間という言葉に対しては、我々が普通に表象している立体としての „空間” の 3 次元性や、また歴史的世界の持つ „空間” に „時間” を加えた意味での 4 次元性に基づく固定的な空間ないし次元に関する概念に拘束されないように注意する必要がある。このことに関連して、我々がこれからも用いるいくつかの基本的な概念について予めその意味を明確にしておこう。特に位相幾何学で用いられる基本概念は次のように定義される。

空間 (近傍系による定義)

点と呼ばれるものの集合 X をとり、 $p \in X$ と表わす。 X の各元 p に対して、 p の近傍と呼ばれる X の部分集合 U_p が

- 1) p の近傍 U_p は必ず p を含む.
- 2) p の 2 つの近傍 U_1, U_2 があれば, ある p の 2 つの近傍 U_3 は U_1, U_2 の両者に含まれる.
- 3) p の近傍 U_p に含まれる任意の元 q に対して, q の適当な近傍 $U_{(q)}$ は全く U_p に含まれる.

という条件によって定義されるとき, 集合 X の元を点と呼び, 点 p の近傍 $U_{(p)}$ の全体 $\{U_{(p)}\}$ を近傍系と呼び, このとき, 集合 X には近傍系によって位相空間が定義されたという.³⁷

空間 (距離による定義)

まず集合 X をとり, $x, y, z \in X$ のとき

- 1) $d(x, y) \geq 0$ (等号は, $x=y$ の場合にかぎる. d は距離の関数)
- 2) $d(y, x) = d(x, y)$
- 3) $d(x, y) \leq d(x, z) + d(z, y)$

が成立するような $d(x, y)$ を定義する. このとき $d(x, y)$ を x と y との距離といい, 距離を導入した集合を距離空間 X という.³⁸

この距離という言葉は普通に我々が考える距離ばかりでなく, 一般に集合の各元の相違に対して適用される. 例えば人間と猿の相違なども, 生物の各々の相違を位相空間的に表現した場合, 生物空間の距離ということができる.

写 像

一般に 2 つの集合 X, Y があって, X の 1 つの要素 a に, Y の 1 つの要素 $f(a)$ が対応するとき, f を X から Y の中への写像という. $a \in X$ のとき $f(a)$ 全体を $\{f(a)\}$ または $f(X)$ と表わし, これが Y と一致する

37. 河野:『位相空間論』p. 36-39 参照.

38. 同 p. 53-54.

ときには X から Y の上への写像³⁹という。また写像は一般に相関々係の数学的表現であって、本文では中への写像を $y=f(x)$ で示し、上への写像を $X \xrightarrow{f} Y$ で表わし、一般には $Y\{y|y=f(x)\}$ を用いることにする⁴⁰。なお上の近傍系 $\{U_{(p)}\}$ において、 $p \in U_{(p)}$ であるような 1 点 p に対し、これに収束する任意の点列 $\{p_i\} \in U_{(p)}$ をとったとき、 $f(p_i)$ が他の集合 $\{V_{(q)}\}$ の 1 点 q の近傍 $V_{(q)}$ に写像されるとき、 $\{U_{(p)}\}$ と $\{V_{(q)}\}$ とは連続であるといい、また一般に $y=f(x)$ において $f(x)$ を y の像と呼び、 y を $f(x)$ の原像⁴¹という。

次 元

空間に座標系を導入してその空間の 1 点 $p=f(x, y, \dots, n)$ と表わすとき、その空間 R は n 次元を持つといい、 $R^n\{p|p=f(x, y, \dots, n)\}$ と書く。この場合の空間の距離は、 $d = \sqrt{(x_1-x_2)^2 + (y_1-y_2)^2 + \dots + (n_1-n_2)^2}$ で一般に表わされる⁴²。

この次元という言葉は便宜的であって、例えば 3 次元空間を移動する 2 つの点の関係は 6 次元空間を移動する 1 つの点としても表現でき、あるいは 2 次元を持つ平面上のすべての点は 1 次元を持つ実数の連続体の上へ写像できる。また逆に歴史的世界に起るすべての出来事は、例えば歴史の本の中の文学の列のように 1 次元的な点列の中へ写像できるが、その本の初めから数えていくつめの文字にあたる出来事と表現するよりは “いつ” という 1 次元と “どこで” という次元を合わせた 4 次元空間内の点で表現する方がはるかに簡単である。また 3 次元以上の次元数を持つ空間を特に高次元空間と呼ぶことがある。

39. 同 p. 19-20.

40. その際 $y=f(x)$ は y の条件式である。

41. 同 p. 39-40.

42. この距離を表わす式はピタゴラスの定理の一般的な形である。

IV

差し当って、意識と無関係にそれ自体で成立すると考えられて来たような客観的実世界の空間構造を検討してみよう。ここではフッサールに従って、環境的自然世界、プラトンの世界、ガリレイ、ニュートンの世界を取り上げてみることにする。

先ず素朴な意識にとって現われる世界は、自分を中心としていつも広がっている世界であろう。このいつものこととはかえって世界空間の歴史性を忘れさせる。また日常言語の中には多くの空間的方位を示す言葉があるが、それらを整理して前後、左右、上下に対応する3つの次元を導入すればこの空間内の事象の位置は最も簡明な形で表現できることに気がつく。また我々を知覚しうるものとしてはせいぜい縦、横、高さで表現される3次元的立方体までであることも3次元的世界像を作り上げるのに役立っている。この世界の形式的な構造に関する幾何学として成立したのがユークリッド幾何学であり、空間 $R_3^0\{p \mid p = f(x, y, z)\}$ で表現できるだろう。⁴³

更にプラトンは超越的実世界としてのイデアの世界を提出することによって世界の二重化を試みたといわれる。⁴⁴ 彼の場合、現象界の事象 h はそれぞれイデア界の原像の写像であり、しかもこの対応関係は想起説で知られるようにエピステメによって発見される。差し当って、ここでは彼の二重世界の写像関係を $I \rightarrow H$ と表わすことができるだろう。ここで H と I がそれぞれ3つの次元を持つとすればこの両方の空間は相互に全く無関係ではなく、その両者の統一空間が考えられる。すなわち、 $R_p^6\{p \mid p = f(x, y, z, a, b, c)\}$ この場合の R_p の6個の次元は I^3 と H^3 の積であ

43. ここでのこの表現は勿論ユークリッド自身のものではない。

44. 例えば Funke: „Phänomenologie“ S. 179. Funke はプラトンの現象界とイデア界という二重世界に関連づけて、フッサールの生命界と学問界の区別を世界の二重化と見ている。

り、個々の対応関係 $i=f(h)$ はこの 6 次元空間 R_6^e の 1 点として示される。こうしてプラトンのイデア界はドクサに関しては $I \xrightarrow{d} H$ であるが、エピステメに関してはむしろ $I \xleftarrow{e} H$ 、すなわち $I \xrightarrow[e]{d} H$ である。こうしてイデア界の超越性も $I \xleftarrow{d} H$ が成立しないということだけに限られる。⁴⁵

次にガリレイ空間を考察してみよう。彼の物理物においては世界の中に現われる物理学的事象についてはユークリッド的 3 次元空間内の位置ばかりでなく、更にその時間的な位置が記述される。この場合その事象点の位置は $p=f(x, y, z, t)$ で統一的に記述される。すなわち

$$R_4^g\{p \mid p=f(x, y, z, t)\}$$

ガリレイはこれを、動いている船の上で字を書いている人の例で上手に説明している。この人はペンでもって „実際には“, つまり地球に対して相対的に、ベニスからアレクサンドリアに到る長くなめらかな、わずかにうねる 1 本の線を引くことになる。⁴⁶ このような曲線はまた 4 次元空間における世界線とも表現される。上の例の場合、4 次元世界内の 1 点の運動が 1 次元の曲線の上に写像されていることになる。こうして、「可能な時空的位置すなわち世界点は 4 次元の連続体を形成する。……さらに時間区間の相当と „空間“ 的形象の合同が（個々の主観によって変更できないような超越的な）客観的意味を持つと仮定することによって、時間と „空間“ に（一義的な外延量的）計量的構造が与えられる。ユークリッド幾何学の諸陳述は、その空間構造をより詳細に記述する。⁴⁷」

こうして得られたガリレイの物理学的超越的世界においては時間と „空間“ はたとえそれらが超越的に考えられているとはいえ、相対的に関連づけられていて、両者は必ずしも別々に考えられていない。しかし「時空

45. このような空間には更にエピステメに関する記憶空間が含まれて来ることによって更に高次元の空間が構成されるだろう。

46. Weyl: „Phil. d. Math. u. Naturwissens.“ S. 68.

47. 同 p. 66.

48. 同 p. 67.

的に接近した任意の二つの異なる事象に関して、それらが同じ場所で（異なる時刻に）または同じ時刻に（異なる場所で）現に起っているということは客観的な意義を持つという意味で、宇宙が絶対的空間と絶対的時間に分裂すると信じる場合⁴⁸ ニュートンの宇宙が得られて来る。すなわち、「絶対的な、真の、数学的時間は、それ自身においてそれ独自の本性からして、外部のいかなるものとも無関係に一様に流れる。……絶対空間は、それ独自の本性からして、外部のいかなるものとも無関係に、常に相等しく不動であり続ける。……絶対運動は一つの絶対的な場所から他の一つの絶対的な場所に移る一つの物体の移動である。」⁴⁹

こうしてニュートンの場合は $R_4^4\{p | p=f(x, y, z, t)\}$ ではなく、一つの物理学的事象は $R_n^3\{p | p=f(x, y, z)\}$ と $R_n^1\{p | p=f(t)\}$ によって個々に位置づけられる。こうして例えば無限大の速度を持つ運動は、このような絶対剛体空間 R_n^3 において可能になるのであり⁵⁰、その際の R_n^3 はまさに主観的な意識仕方を含むその他の一切のものから、時間からすら、独立して成立している。

V

以上にのべて来た物理学的ユークリッド空間 R_4^4 とは別に、意識側に視線を移して、果して意識そのものに空間的な構造が考えられるかどうか、もしそうだとすればどのようにして接近できるかを検討してみよう。フッサールのいう意識は勿論その対象との相関々係を離れることはできないが、ここでは問題を簡単にするため、差し当って体験の意識側だけを、しかも自我の意識に限って眺めることにする。ここで我々は自我の一つの意識状態を、生理学上大脳皮質の一つの状態に対応して、それを s として

49. Newton: „Principia“ S. 6-7.

50. このような無限大の速度の運動の可能性については、アインシュタインの方程式、 $mV = m_0 / \sqrt{1 - \left(\frac{V^2}{C^2}\right)}$ によって否定されたことは周知の通りである。

みよう。そうすれば更にこの私の大脳皮質は約 100 億ケの大脳細胞から成り、それぞれの細胞は電氣的パルスを通過させるか、あるいは通過させないという一つの開閉回路と見なされ、隣りあうそれぞれの細胞は相互に接続されている所から大脳皮質は全体として 10^{10} のスイッチング回路から成る回路網と見なすことができ、またその回路網の 1 つの状態は 10^{10} 次元の空間 B の 1 点と表現出来る⁵¹。また意識状態は一般に空間 B 内を移動する 1 点としても示すことができる。即ち

$B^x \{s \mid s=f(c_1, c_2, c_3 \dots c)\}$ 但し $X=10^{10}$, c は 1 つの大脳細胞の 1 つの状態
更にこの B は別の仕方で位相づけることができる。すべての s の集合 $M_{(s)}$ が考えられ、しかも一つの s_n が観察されるとそれと相接する近傍点 s_m, s_0 が観察され、こうして $M_{(s)}$ は s_n の近傍として区間 $M(s_m, s_n, s_0)$ が指定されて位相づけられる。但し s_n の近傍点は 2 つだけあって、 s_m と s_n の間、または s_n と s_0 の間にはそれ以外の s は入って来ないものとする。このような近傍によって定義された空間 R_s は 1 次元の距離空間 R_T に写像できる。

$$R_s \xrightarrow{f} R_T \quad \text{但し} \quad \begin{cases} s=f(t) \\ s=f(c_1, c_2, \dots c) \end{cases}$$

この場合、 R_s の移動点 s は連続的に R_T 上の各点に対応する。こうして移動点 $s=f(c_1, c_2, \dots c_x)$ が R_T 上の対応する一つの T_s 点に写される。こうして更に高次の空間 $R_s^1 \times R_T^1 = R^2$ が得られる。すなわち

$$R_{sT} \{(R_s, R_T) \mid R_s \xrightarrow{f} R_T\}$$

これをフッサールの言葉を借りて表現すれば、自我の意識はその意識流において現象学的現在を、更に現象学的時間全体を、構成することになる。こうして我々は R_s をフッサールの第一次的世界あるいは意識流の構造に、 R_t^1 を現象学時間に、それぞれ対応させて考えることができる。またフッサールのいう現象学的な時間の構成は R_s の R_t への写像を意味

51. Arbib:『頭脳, 機械, 数学』p. 40 参照.

すると言える。更に先に進むにつれて現象学的な構成を一般に „写像” という数学的な言葉で表現しても差し支えないだろう。すなわち „構成” とは現象学上先験的な意識の構造ないし形成と対象に与えることによって、その対象の構造ないし形式を „意識に相対的に” 決定することに他ならないからである。

さて我々はここで更にこの R_T を単純に実数の等質的連続体の上に写像するわけには行かない。我々は確かに1つの s と区別可能な s' を観察できるとはいえ、2つの s が時間的に非常に接近して現われた場合、それらはもはや識別不可能になる。つまり大脳空間の十分接近する二点、 s と s' は実際には同じ点として観察され、この場合 s と s' は許容関係 \sim にあるといわれ、 $s \sim s'$ (但し $s \sim s, s' \sim s$) と書かれる。この s と s' にそれぞれ1ケの実数値を対応させて区別することは不可能だし、またそうしたところで実際には無意味である。この場合、実数的には s と s' は一つの点列 si で表現されるが、 $Rs \xrightarrow{f} R_T$ の場合、 si はそのまま R_T の一点に収束する点列 ti に写像される。言いかえれば更にこの R_T の一点を実数的に一義的に確定することは不可能であって、 R_T は Rs の持つ不確定性をそのまま写像された連続体である。この事実は例えば残像現象などに関連して心理学的には早くから認められて来たが、フッサールもまた意識流の1点を過去と未来との間のいかなる延張も持たない切断点とは見ず、時間的に近い不確定な過去と未来を含むものとしている⁵²。

ここですべての可能な s の集合 $M(s)$ は時間的に位相づけられたが、更に R_e^4 のようにユークリッド空間変数 x, y, z を空間 S に導入すべきでないか

52. こうしてフッサールによれば意識の志向は現在志向と共にまた過去志向を含み、また特に記憶においては未来志向をも含む。『時間意識』S. 31f. S. 53 参照。更に一つの意識状態が実数的な連続体としての一義的に計量可能と考えられた時間連続体のどの点に対応するかという情報に関しては、その情報のあいまいさを特徴づけるエントロピー量として $\epsilon(\beta)$ を導入して確率的に考えることができる。(ヤグロム：『情報理論入門』p. 39.) 但しその場合の計量常数 $\log k$ として何をもって来るかは問題であろう。

という問題が起るが、この導入は必ずしも必要ではないだろう。つまり、私の現在の意識状態 s を一般に空間 Rt を移動する不確定な現在点とした時、もし私が場所を移動するとすれば、それに伴って必ず点 s が空間 R_s を移動しているはずであって、逆に s の移動 (時間の変化と言ってもよい) は必ずしも場所の移動を意味しない。たとえ R_s を $R\{p | p=f(x, y, z, t)\}$ に写像したとしても、 x, y, z の少くとも一つの変化は同時に t の変化を伴うが、逆に t の変化は必ずしも x, y, z の少くとも一つの変化を伴わない。簡単に言えば、私が一つの場所から他の場所へ移るときは必ず時間を多少なりともかけねばならないが、逆に私がじっとしていれば場所は変わらないにしても必ず時間は経過している。即ち t は x, y, z に関して共変であるが、逆に x, y, z は必ずしも t に共変ではない。ここからすれば $M_{(s)}$ を位相づけるための最低条件として時間の次元だけを導入すれば⁵¹ それで十分であることが解る。

さてここでその点の位置が不確定であるような空間を X とし、その特定の 2 点 x, y が互いに識別できない場合 $x \sim y$, (従って $x \sim x, y \sim x$) とし、この関係 \sim を許容関係 ξ で示すと点 x, y を含む空間 (X, ξ) は許容空間と呼ばれる。上記の意識空間 R_s は一つの許容空間であることが解ったが、更に R_s の写像空間 R_T には R_s の許容関係 ρ がそのままあてこまれている。このとき写像空間 S すなわち

$$S[\{(R_s, \rho), (R_T, \rho)\} | (R_s, \rho) \xrightarrow{f} (R_T, \rho)]$$

は許容連続写像空間となる。その際 R_s と R_T はそれぞれ S の部分空間である。こうして更に R_s^1 上の一点を r で表わせば、 $S = \{s | s=f(r, T)\}$ となり、更に

53. „空間“ に対するこの時間の 特異性は更に別の仕方で前述のアインシュタインの方程式と共に彼の距離方程式 $d\sqrt{(x_1-x_2)^2+(y_1-y_2)^2+(z_1-z_2)^2-(t_1-t_2)^2}$ とも関連づけることができる。なおこのことに関しては更に Reichenbach の „Phyl. of Space & Time“ p. 109-113 参照。

$$\begin{cases} s=f(p, T) \\ s=f(c_1, c_2, \dots, c_x) \end{cases}$$

を満足するような S を考えてみると、

$$S\{s|s=f(c_1, c_2, \dots, c_x, r, T)\}$$

こうして更に高次元の空間 S^{x+2} が得られる。

以上の検討からして、差し当たり次のようにまとめることができるだろう。

1. フッサールの自我の純粹意識を大脳細胞の回路網の一つの状態と考
えて、 X 次元の意識空間 B_c^x を移動する点 s で表わす。
2. R_s^1 の空間構造はフッサールの意識流の時間的構造に対応する。
3. 意識流の構造によって構成された現象学的時間は空間 (R_s^1, ρ) の写
像 (R_T^1, ρ) である。
4. R_s^1 の中を移動する点 s に対応する R_T^1 上の点は現象学的現在と言
い表わすことができ、 R_T^1 の全体を「意識流の流れの形式に従って構成さ
れた現象学的時間」ということができる。
5. こうして得られた $X+2$ 次元の許容連続写像空間

$$S\{(s \sim s')|s=f(c_1, c_2, \dots, X, r, T)\}$$

は、自我の意識と現象学的時間との統一空間であるといえる。

また、自我の意識の空間における1つの意識状態は、その空間内の1点
と表現されるものであり、こうしてこの点そのものは我々が普通 „世界”
と呼んでいるような構造を示すものとはいえない。勿論この点自身、その
内的な構造を持たないものではないが、世界を何らかの時空的構造を持つ
ものと仮定してみれば、そのような空間構造は意識流において始めて認め
られるのであって、こうしてフッサールが意識流に対して初めて „世界”
という言葉を使った理由も理解できる。

以上のようにして我々は諸世界を便宜上主観側と対象側に分けて個々に
考察して来たが、本来現象学は独我論的意識実在論でも、また意識対存在
ないし主観対客観の二元論でもなく、むしろそれらより高次の統一的相関

論であるということであらためて確認すべきだろう。こうして次には II でのべた意識とその対象の相関々係 $s=f(o)$ を 1 つの点とする空間の構造を考察して行くことができる。またそのためには特に量子力学的世界像が上記の許容大脳空間に関連して理解の助けになるだろう。